HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エゾオオカミをめぐる歴史と文化 : 日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討 [全文の要約]
Author(s)	梅木, 佳代
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13710号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76329
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Kayo_Umeki_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：梅　木　佳　代

学位論文題目
エゾオオカミをめぐる歴史と文化：日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討

本稿は，エゾオオカミを事例として，日本のオオカミに関わる言説およびオオカミ観の変遷過程について，文献資料上の情報から検討を試みることを目的とする．

エゾオオカミ（*Canis lupus hattai*）は，かつて北海道，サハリン，択捉島，国後島に生息したハイイロオオカミ（*Canis lupus*，以下オオカミと表記）の亜種である．日本列島内には，ほかに本州・四国・九州に生息していたニホンオオカミ（*Canis lupus hodophilax* あるいは *Canis hodophilax*）が存在したが，どちらのオオカミも明治時代に絶滅したとされる．

日本在来のオオカミに向けられる関心は高く，これまでにも多くの取り組みや情報発信が行われてきた．しかし，日本のオオカミをめぐる研究状況は，社会的にも学術的にも「百家争鳴」状態にあって，「混迷」していると指摘を受ける状況にある．筆者は，この混迷した状況は，明治時代以来およそ150年間にわたって発信・蓄積されてきた情報が，まったく整理されていないことに起因すると考える．過去の日本国内ではオオカミと人はどのように関わりあってきたのか，その実態を明らかにするためにも，過去から現在への研究や言説の動向を踏まえた議論が必要と考える．

とくに，これまでのエゾオオカミに関する議論では，北海道内にオオカミが生息していた期間の情報や資料が非常に少ないことが前提とされてきた．しかし，学術的な議論の中ではそうした前提を踏まえたうえで「仮説」として提示された情報が，繰り返し参照されるうちに単純化され，「結論」として新規の議論に供されている．どこまでが事実に基づく内容なのか，具体的な検討と確認が行われなければ，各分野や時代的な背景に応じて納得しやすい認識が先行し，それによって不適切な議論が生じる可能性が危惧される．そうした実態を明らかにしていくためにも，過去から現在への歴史的な議論の経緯の明確化と，変遷の有無を把握する必要があると考える．

日本のオオカミに関する従来の議論の流れを把握し，同時に過去の情報の

拡充を進めることができれば，日本人が野生動物としてのオオカミに対する理解を過去から断絶させているのか否か，もし断絶が起きているとすれば，どの時点で何が変化したのかを明らかにしていくことも可能となると考える．これは，日本国内における人と動物の関係史の一端を解き明かすことにつながると同時に，1990 年代に提案された，日本列島内へのオオカミ「再導入」をめぐる議論において，将来にわたってその是非を検討し，適切かつ妥当な意志決定を図っていくためにも必要な作業といえる．

野生生物を過去の生息地に移植・再導入する取り組みは，海外では 1970 年代から積極的に実施されてきた．現在では，過去に失われた自然を復元し，再生することを目的とした「自然再生事業」の一環としても重要な手法であると位置づけられている．日本へのオオカミ再導入は，おもに生物多様性および生態系の保全にくわえて，多額の被害をもたらす獣害防除などの観点から検討されているという．絶滅によって日本列島内のオオカミが不在となっていることは事実であり，これは，将来にわたる生物多様性の保全や自然再生のありかたを考えるうえで常に解決すべき問題点であり続ける．再導入という手法の有効性が完全に否定されないかぎり，問い返しが続けられるだろう．ただ，北半球全体を分布域とするオオカミは，地球上の現生哺乳類の中でもとくに環境への適応度合いが高いことで知られている．環境に合わせて多様な生態を示す種にあっては，新たに導入された地域でどのような行動・生態をみせるのか推測することは難しい．この点について妥当な推測を行うためには，過去に日本列島内に生息していたオオカミに関わる情報を集約して検討する必要があると考える．

以上を踏まえて，本稿は，明治時代以降に日本国内で発表された日本のオオカミに関する文献と，その記述内容を分析・考察の対象とし，日本人とオオカミの関係性について現在までの状況を確認する．まず，明治時代以来の研究動向を確認するために，国内で発行された日本のオオカミに関わる文献を可能なかぎり網羅的に確認することを目指した．対象資料の収集は，オンラインの検索サービスおよびデータベースを利用して基礎資料を収集し，そのうえで各地の図書館等の施設を利用して広く文献の渉猟を行った．研究史の検討に際して必要となるのは日本のオオカミに関する知見の提示や考察・議論を行った文献であり，これまでに 970 件の文献を収集し，分析対象として位置づけた．

一方，エゾオオカミと人との関わりについて分析を行うためには，既知の文献に加えて新たな対象資料を収集する必要があった．また，北海道におけるエゾオオカミをめぐる歴史・文化を検討していくためには，アイヌ民族と和人の双方の記録を参照することが望ましいと考えた．そこで，本稿では，和人側の情報を得るために，北海道内の自治体が刊行する「市町村史」を対象とした調査を行った．一方，アイヌ民族側の情報については，アイヌ民族

の口承文芸の内容，研究者である更科源蔵による刊行文献，および更科がアイヌの人々から聞き取った情報をまとめた記録『コタン探訪帳』,『コタン探訪日記』を対象として調査に取り組み，オオカミとの関わりに言及がある情報を抽出・収集した．本稿の執筆にあたって収集と確認を行った資料は，本文中では言及することができなかったものも含め，すべて巻末の資料編にまとめ，再現・検証性の確保につとめた．

本稿の章立てとしては，まず序章において研究背景，問題の所在，研究目的を確認し，議論に取り組むにあたって必要となる手法，構成を確認した．

第 1 章では，日本におけるオオカミの研究史の検討を行った．年代ごとの主要な取り組みや動向を明確化し，オオカミをめぐる議論がどのように進展してきたか確認した．結果として，日本のオオカミをめぐる研究史には，2 度の画期と呼べる時期が存在することを明らかにすることができた．また，特定の言説が，エゾオオカミ・ニホンオオカミに対する意識や考え方を変化させてきた可能性についても検討した．なお，第 2 章以降の議論はすべて第 1 章の内容を前提として取り組むこととする．

第 2 章では，北海道内の市町村史を対象としてオオカミに関する記述を抽出し，その整理と分析に取り組んだ．従来，エゾオオカミは，おもに明治時代に入ってから北海道に持ち込まれた家畜に対して甚大な被害を出した害獣だったと理解されてきたが，本稿では，実際には江戸時代から家畜ウマに対する食害が起きていたことを確かめた．また，家畜に対する被害だけでなく，開墾や道路建設などの状況下では，人がオオカミに対して「恐怖感」や「脅威」を感じていたことを示す記録も存在した．実際の事例を踏まえたうえで，今後の議論では北海道における和人とエゾオオカミの関係性について，あらためて検討していく必要性を提示した．

第 3 章では，アイヌ民族とオオカミのかかわりについて検討した．近代以前の北海道におけるアイヌ民族とオオカミは，互いの存在を脅かすことなく平和に共存共栄していたと考えられてきた．しかし，そのように記述される状況が，実際にはどのような資料・媒体から得た情報を元として描き出されてきたのかは明確ではなかった．先行する言説を踏まえたうえで，アイヌ口承文芸にあらわれるオオカミの表現，さらに聞き取り調査記録の内容と照らし，アイヌ民族とオオカミの関係性について，和人の研究者による情報のコントロールが行われていた可能性を指摘した．

第 4 章では，研究史における論点と，各章における議論・検討の結果として得られた知見とを集約した考察を行った．従来，エゾオオカミは「日本の」オオカミであるニホンオオカミに関する議論を支え，傍証する存在としての価値を付与されてきた．ニホンオオカミと関わる論点のみが注目され，掘り下げられ，本州以南でも同様の事態が起きていたとする前提に立ってエゾオオカミ側の情報が利用されている．しかし，実際には明治初期の北海道にお

いてオオカミに向き合った「入植者」である人々の置かれていた状況は本州以南とは大きく異なり，容易に比較検討するべきではなかったと考える．従来の日本の２種のオオカミをめぐる議論は，日本列島内すべてが均質であるべきとする視角からなされていたが，「日本人とオオカミ」という巨視的なとらえ方をしてきたからこそ，細部の特徴や地域ごとの特異性をそぎ落とし，混迷した状況を生み出す結果に繋がってきた．そうした取り組み方は改められるべきと考える．

終章では，これまでの議論を総括し，本稿における結論と今後の課題とすべき点を述べている．

本稿における議論を通して，従来は明治時代に入ってから起きたとされるエゾオオカミと人との間の軋轢が江戸時代後期まで遡ることを確認したが，さらに当時の人々は，エゾオオカミがもたらす家畜被害のみならず，大型の肉食獣である存在そのものを脅威とみなしていたことも示唆された．とくに明治時代には，故郷を離れて入植した先で強い脅威や困難に直面することは，入植者にとってはこのままでは生活を続けていくことができないという危機感を大きくあおられる事態だったと推測される．家畜被害の有無にかぎらず北海道内の多くの地域でオオカミが捕殺されたのは，脅威の根源となる存在を取り除くことが目指されたためだったと考える．

エゾオオカミが絶滅して不在となってから100年を超える空白期間が生じている．現在，その結果としてオオカミをめぐる歴史・文化の断絶が生じ，野生動物としてのオオカミの「正しい姿」を理解することが困難となっているとする指摘がある．しかし，本稿では，過去から大きく断絶しているのは，むしろ害獣観に基づくオオカミへの理解であると考察した．北海道における人とオオカミの関係性については，海外からの主義，思想や技術の流入さえなければオオカミとは平和に共存できたとする理想論が語られ，現実や，過去の実態がなおざりにされてきた．都合の良いように歴史を修正してきたということもできる．

過去の人々は，エゾオオカミと向き合った際にどのような困難と直面していたのか．北海道におけるエゾオオカミ，和人，アイヌ民族，お雇い外国人など，複雑に絡み合った要素や背景についてより具体的に分析し，共存していくためには何が必要だったのかを明らかにしていくことが，今後の研究では必要となると考える．